
記憶 ~ 雨が降る刻 ~

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶 ～雨が降る刻～

【Nコード】

N0924Z

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

あたしは誰なのだろう。

あたしはなぜ生まれてきたのだろう。

少女の頭にはただ、疑問だけが渦巻いている。

あたしの名前は、何だろう。

雨だけが

答えを知っている。

プロローグ（前書き）

夕焼けです。

知っている方も知らない方もよろしくお願いします。

プロローグ

あたしは 何のために生れたのだろうか。

あたしは どうして生きているのだろうか。

雨が降る河原に座り込んで少女は考えた。

灰色でみすばらしいフードつきの羽織を羽織っている。

あたしは なぜ此処に居るのだろうか。

あたしは 誰なのだろうか。

少女の頭の中には疑問しかなかった。

雨がとどめなく少女の体を打ち付ける。

あたしの名前は。

何だろう。

雨に混じり一粒の涙が零れ落ちた。

道行く人々は気付かない。

少女の存在に。

あたしは どこで生まれたのだろうか。

あたしに家は 有るのだろうか。

一人の少女は泣き崩れた。

それでも誰も声をかけてくれない。
道行く人々は、少女の姿が見えないから。

何のためにあたしは存在しているのだろうか。

少女は静かに立ち上がり呟いた。

「あたしは誰なの？」

雨は

静かに降り注ぐ。

プロローグ（後書き）

短いですね。

面白い！！と思っただ方は感想下さい！

待ってます！！

第1話 存在

少女は歩き出した。

誰か自分の姿が見える者はいないか、
誰か手を差し伸べてくれる人はいないの
と。

「うっ！」

水にぬれ滑りやすくなった道路で少女は転んだ。
勿論道行く人々は少女に目もくれない。

否、少女が見えないのだ。

「はあはあはあはあ。」

ただ闇雲に走り、歩く。

誰も、あたしの存在に気付かない。

少女は何も考えられなくなった。

元の場所に戻ってきた。

あたしは、この世に本当に存在しているのだろうか。

自分自身に問うたところで何も答えが分からない。
分からないのだ。

何もかもが。

どうして。

あたしは

何なの。

少女は何もかも分からないのだ。
まるでこの世に存在していないように。

何。

あたしは

何なの。

誰にも聞けない、聞いたところで答えなど返ってこない疑問を少女は投げつける。

雨が降り続ける空に向かい。

「あたしは何？」

と。

少女はただ、泣く。

泣いたところで誰にも慰めてもらえないし、誰も少女の涙には気付かないのだが。

ただ、少女は泣きたかった。

誰の気に留められなくてもいい。
ただ、

?あたし?と言う存在を知りたい。

そう願いなから。

雨が止んできた。

雲の谷間から太陽のまぶしくそして暖かな光が少女を包み込んだ。だが、その光とは裏腹に少女の心はさらにさめて行った。

嫌だ嫌だ嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

彼女は太陽の光が届かないところへ走った。

嫌だ嫌だ嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

日陰に入り一息つく。

何も分からなかったが太陽の光に当たりたくない少女は本能的に考えた。

何でだろう。

あれ程までに暖かくてあれ程までにまぶしいのに。

何であたしはあれを拒絶してしまうのだろうか。

少女は己の身を縮め草原に寝転ぶ。

葉の冷たさが少女の興奮しているからだから熱を奪つ。

ああ。気持ちいい。

少女はそのまま寝入ってしまった。

目が覚めた。

そのころにはもう外は真つ暗で真冬の寒さが身に染みる。

どこか、温かい場所へ。

ゆういつ身にまとっている灰色の羽織はこの冬を乗り越えるにはあまりに薄かった。

もう少し、分厚い服が必要かな。

少女は服を求めて河原を出た。

その時後ろで声が聞こえた。

「見つけた。久しぶり。ミッドナイト。」

後ろで声が聞こえた。

少女は驚いて振り向いた。

「だ、れ？」

名前

「だ、れ？」

少女は目を見開き答えた。

まさか自分の姿が見える人が居るなんて。

「やだな。俺の顔、忘れちゃったんかい。俺だよ、俺。」

自分に向かって親指を立てる青年は言った。

青年は青いシャツに青いズボンに青い靴を履いていた。

何故、青いものばかりをはいてるんだろう。

誰もが思っ疑問だ。

髪型はそこそ長く一つに後ろで結んでいる。

だが、それはよく似合っておりどこか目を引いてしまうのが分かる。

「俺俺言われても分かりませんよ。名前は何ですか？」

名前。この言葉を言った少女の心はチクリと痛くなった。

名前。彼には名前があるのだろう。

だが、あたしには名前がなくて…。

「ああ、そうだ。俺はs k y。知っているだろ。m i d n i g h t。」

「
みっどないと。

彼、否スカイはそうあたしを呼ぶ。
何故だろう。

「その、ミッドナイトって何？」

少女は腰に手を当て聞いた。
ヒューと冬の風が吹く。
少女は風に身震いをした。

「はっ？何言ってるんだよ。もしかしてお前、記憶が…。」

「記憶？…。それがどうしたの？」

記憶なんてものは今の少女にとってはどうでもよかった。
ミッドナイトとは何かを知りたかったただだから。

「ふう。そういうことか。…。」

勝手に一人で納得したスカイは少女を凝視した。

「な、何？」

少し考える素振りを見せた彼は何かを思ったのか、少女に向かって
こう言った。

「お前、さっき聞いたよな。俺に。？ミッドナイトって何？って。」

「ええ。」

少し自体が飲み込めないがそれは後で考えることにして少女はsk
yの声に耳を傾けた。
何か、分かるかも知れない。
そう思いながら。

「答えてやるよ。ミッドナイト。それはお前の名だ。」

「…えっ？」

少しの間があり少女は答える。
自分にも名があった。

だが、ミッドナイトが己の名となると少し疑惑が浮くものだ。

「まあ、正確にはミッドナイトを二つに分けてミッドとナイトの頭
文字をとってミナ、だけだな。」

ミナ。

それがあたしの名。

ミナは己の名が分かり嬉しさに震える。

ミナ。それがあたしの名。

ミナはただただ嬉しかった。

「そゆこと。で、これがお前の名ってこと。分かったか？」

「うん。名前、教えてくれてありがと。」

あたしは笑顔をスカイに向けた。

スカイは少し照れたように頬を手でポリポリとかく。

アイツのああいうところ。

変わってねエな。

と思いながら。

「でも、まだ疑問が残ってる。…。スカイ。あんたは何者？なぜ、あたしの姿が見えたんだ。」

ミナの口調が少し変わる。

聞いたただすような口調だ。

少しだが迫力を感じる。

「そうだなあ。あんたは何者って言う疑問には答えられないな。あえて言うなら、お前と同類。」

スカイは手をひらひらと振り答える。

「何故だ。」

まだ、口調が厳しかった。

答えになっていないと判断したからだろう。

「ま、これは命令だからなあ。」

「命令？」

スカイの密かな呟きをきちんと聞き取ったミナはさらに言う。

「誰の命令だ。第一お前はまだあたしの質問に答えていないだろう。」

鋭い目つきだ。

何もかもが透視されているような感覚だった。

変わんねえな。

スカイは思う。

あの時から何一つ変わっていないのだ。

変わったのはあいつの記憶と。

「それは、言えねえな。あと、お前の姿がなぜ見えたかって？」

「…。」

ミナはもう答える事さえしなかった。

完全にスカイを敵と見做し始めているからだ。

「んだよ。答えなしか。ま、良いぜ。教えてやるよ。」

ゴクッ

ミナはつばを飲み込んだ。

こいつ、何であたしの名を知っているんだ。
姿が突発的な癖をして。

あたしの記憶が何？

アイツはあたしを知っているの？

スカイは…。

あたしのことを…。

と思いながら。

「さっきも言っただろ？ミナ。お前と俺は同類だって。」

「それは答えになっていないだろう。」

ミナの警戒が強くなる。

はあ。昔からだぜ。こいつのこつこつところ。

「そうだな。ま、それは良いとして。俺はなぜお前の目の前にいて
悠長に話しているか分かるか？」

「そんなもの、分かるわけないだろう。」

まっ、そうだろうな。

「教えてあげようか？俺がなぜ、お前と長話をしてお前をここから
動かないように足止めをする訳が。」

ガクッ

ミナは急に体全体に力が入らなくなった。

な、に？これは。

「お前、何をした？」

「別に。これは俺の部下がしたことだ。」

シュシュン

スカイが後ろを見た瞬間に、周りの草影から2人程、人みたいなのが飛び出しミナを捕まえる。

「うつ！何をする！離せ！！！」

ミナは腕、胴、首を捕まれている。
完全に不意打ちだった。

「しょうがないだろ？ミナ。お前を拘束するためなんだから。」

スカイはミナを見つめ言った。

くっ。こいつ！

「離せ！お前！！離して！！！」

ミナは暴れた。

だが、体に力が這い合っていないミナを取り押さえることは至極簡単だった。

「無駄だぞ。ミナ。それはお前もよく知っていたハズなんだけども分かってるだろう？こいつらは主人の言うことしか聞かないものだって。」

スカイは少し残念そうな顔を言った。

「残念だな。もう少し、お前と話したかったんだけどな。」

「離して、離しなさいよ！！」

ミナはまだ暴れている。

「無駄だったこと。分かんないかな？」

びゅん

スカイはミナの首筋に衝撃を加える。

「うっ！」

ミナは気を失った。

何で、何でよう？

最後にこう思いながら。

「ごめんな。ミナイや、ミッドナイトか。もうこうするしか、他に方法は残っていないから。」

スカイの言葉はゆっくりと闇の中へ消えて行った。

過去

貴方は誰？

これがあたしの最初で最後の記憶だ。

あたしは小さな小屋にいた。

外は朝焼けで明るい所と暗い所があった。

あたしは小屋に入って立っていた。

あたしが問いかけた人は大きな椅子に座っていた。

「俺？俺はムーンだ。」

「ムーン？」

「そう。月って意味だ。」

あの時のあたしはまだ幼かった。

ムーンと答えた男は金髪で青い瞳をしている。

「月？」

「そう月。真夜中にいつも違う形で表れて太陽が昇って来ようとすると消える。金色だったり、紫だったり。色々な色をしているんだ。」

当時のあたしはあまりにも無知だった。

幼いあたしはムーンを穴が開くほど見つめていた。

今のあたしはその時のあたしの行動を理解できないが。

「何で色が変わるの？」

首をこてつと横に動かす。

「さあな。そこまでは知らないさ。」

「そう。」

あたしは少し洩んだ。

そんなあたしを見てか、ムーンは立ち上がり窓を開けて言った。

「けど、いつも違う色をしていつも違う形をしていつも違う表情をしているってこと。それが、月の魅力だと思うんだ。」

そして、ムーンは笑いながらこちらを向いた。

「なんか、俺みたいだろっ。」

そう言いながら。

そしてあたしは驚く。

ムーンの髪・瞳の色が変わっていたから。

「俺は特殊でな。月が出ていないと本当の自分の姿にはなれないんだ。」

色はどんどん変わる。

髪の毛は青に。瞳の色は金色に。

どうやら、髪の色と瞳の色が逆になっているようだ。

ムーンは窓の方を向きながら語った。

自分は特殊。なぜか、そういう体質に生まれてきたんだ。原因は多分、月の魔力。まあ、それが分かったのは俺が大人になった時さ。

勿論、こういう体質を俺の親達は拒絶した。

拒絶したって何も変わんねエんだけどな。

それで、親達は俺を見捨てたんだ。

正確には、孤児院に預けた。

しかも、俺みたいな体質の奴がたくさんいるところにな。

そこで俺は名をもらった。

ムーン。それが俺の名。

？月？と言う意味だって聞いてすぐに納得した。

分かりやすい名前だなんて。

そこで俺は友と呼べるものを作った。

皆特殊だったんだ。

それで俺はほつとした。

自分だけが異端ではないということが分かったから。

そう言うムーンの背中には蔭っついていて。

とても悲しく見えてのを覚えている。

ムーンがあたしに名をくれたんだ。

あたしも異端者だったから。

「お前、なんていうんだ？」

「名前は無いんだ。親の顔も知らない。」

ギュツと拳を握った。

「そうか。それならお前に名をやるつ。」

ミッドナイト。それを二つに分けミナ。それがお前の名だ。

「ミッドナイト。でも、ミナ。」

あたしは繰り返した。

以外にもその名前があたしにぴったりだと思ったから。
どうしてだかは覚えていない。

「お前、どうしてここにいるんだ？と云うか、何時入ってきたんだ？」

あたしは再びムーンに謎をぶつけられた。

そんなことは分からない。

自分だっていつの間にか此処に居たのだから。

「分からない。」

素直に答えた。

「そうか。」

ヒューと風が吹きムーンの髪の毛を揺らせる。

「なら、一緒に住むか？」

笑顔であたしにそう言った。
あたしはうれしくなった。

「うん!!!」

あたしもとびつきりの笑顔を返した。
今まで生きてきて一番笑った瞬間だった。
それは今でも変わらない。

「そうか。これから宜しくな。ミナ。」

ムーンが近づき手を伸ばす。
あたしは手を握った。

「こちらこそ宜しくね!ムーン!!!」

あたしは思い出を遮られた。
スカイの声によって。

「起きろ、ミッドナイト。」

その声はとても澄んでいて良く響く。

「うっ。な、に?」

のっそりと起き上がる。

何か首筋がズキズキし手を回した。

「前を見る。」

言葉少なく言われたそれはあたしの目を覚ますのに丁度良かった。

「久しいな。ミッドナイトよ。」

あたしは椅子に座らされ、周りを見る。

大きな大聖堂であたしの目の前には白く半円の形をした机が置かれている。

声が出た方を見ると階段見たく、三角形に上から人が並んでいる。

上から、長いひげを生やした一人の老人2段目に若い女の人と眼鏡をかけた若い男。

3段目は少し年を取っているおじさんと背が低い女の人。

最後の段は髪の毛が長くきれいな女の人とその人にそっくりな髪が短い女の人が居る。

あたしに声をかけたのは一番上に座っている老人と見受けられる。

「……。お久しぶりです。」

少し間を置き答える。

一番上の老人のことを思い出したから。

「アース老師。」

「うむ。」

罪

「アース老師。ミッドナイトを連れてきました。」

スカイは膝をつき頭を下げながら言う。

「うむ。その者を前へ。」

静かに口を開くアース老師だが、老人とは思えない気迫・厳格さ。スカイ・ミッドナイトは共に身震いをする。

「ミッドナイト・アルファレ。お主は自身が犯した罪のことを覚えておるか？」

ミッドナイトが前へ出た瞬間に掛けられた老師からの一言。一言一言に只ならぬものを感じられミッドナイトは顔を上げられなくなった。

「いいえ。」

簡潔にそして静かに答える。

「そつか。」

老師もまた静かに答える。

大聖堂には老師の声が響き渡る。

「ホンマのこと、言っていますか？」

少し、京都弁みたいな言い方の上から2段目の女の人がミッドナイトに話しかけた。

「嘘ついたらあきまへんでえ？ちゃんと、ホンマのこと言わな。」

ポニーテイルにしている髪を揺らしながら、こちらを振り向く。その眼に見つめられ、ミッドナイトはすべてを見られているような気分になった。

「あら。」

そうつぶやき、女の方はこちらを見るのをやめた。

「どうやらホンマみたいですね。老师様。」

「そうか。」

上を向き、老师に告げる。

その声はミッドナイトには聞こえなかった。

「しばらく、お主を捕虜とする。動くでないぞ。」

「はい。」

話の進みようがいまいち良く分からない、ミッドナイトは大人しく従う。

「しばらくは様子見じゃ。」

スカイにひかれ居なくなったミッドナイトが出て行った扉を見つめながらアース老師は呟いた。

罪（後書き）

…。短い。あまりにも短い。

全然、続きが思いつかないというハプニング…。スランプ。

しかも、書き方があまりにも下手。

本当に、どっかに文才落ちてないですかね!?!? そんな訳ないんですけど…。

感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0924z/>

記憶 ~ 雨が降る刻 ~

2011年12月18日08時49分発行